

Surget-Groba, Y., B. Heulin, C. Guillaume, R. S. Thorpe, L. Kupriyanova, N. Vogrin, R. Maslak, S. Mazzotti, M. Venczel, I. Ghira, G. Odierna, O. Leontyeva, J. C. Monney and N. Smith. 2001. Intraspecific phylogeography of *Lacerta vivipara* and the evolution

of viviparity. *Molecular Phylogenetics and Evolution* 18: 449–459.

Takenaka S. 1991. A note on the reproduction of the lizard *Lacerta vivipara* in Hokkaido, Japan. *Japanese J. Herpetol.* 14: 79–80.

沖永良部島のアオカナヘビについて

竹中 踐

005-8601 札幌市南区南沢5-1-1 北海道東海大学工学部

On the grass lizard, *Takydromus smaragdinus* in the Okino-erabu Island

By Sen Takenaka

School of engineering, Hokkaido Tokai University, Minamisawa 5-1-1, Minami-ku, Sapporo 005-8601 Japan

2000年3月29日から3月31日にかけて鹿児島県の沖永良部島（和泊町，知名町）においてアオカナヘビ（*Takydromus smaragdinus*）の生息調査およびそれに関する聞き取り調査を行った。アオカナヘビについての聞き取りは写真を示して行った。天候は3日間とも晴れであった。

3月29日は和の周辺および丘の上にあるテレビ塔までを徒歩で調査した。両生爬虫類の目撃はなかった。畑作業中の高齢女性2人からの聞き取りではトカゲ類は周辺に生息せず、緑色のトカゲは昔から見たことがないとのことであった。

3月30日からは自動車を使用し各地を調査した。30日の午前中は昇竜洞と大山周辺を調査した。大山の丘陵上部に植物園があり、樹林および草地も多く存在したが爬虫類は見られなかった。大山植物園のみどり推進課（知名町）職員とその事務所を訪れた道路作業員の話では、写真を見て「これ（アオカナヘビ）はいることはいる」とのことで、「草の上について、昔は石垣のまわりによくいたが、少なくなった」とのことであった。午前11時に隣

接した保安林の池においてウシガエル（*Rana catesbeiana*）の成体3個体を目撃した。その他の両生爬虫類の目撃は得られなかった。付近の畑作地間の路上でイタチの轢死体1例を目撃した。畑作業中の男性に写真を見せて聞き取りしたところでは緑色のトカゲはいないとのことであった。

調査途中で役場の経済課において農薬散布と移入動物について聞き取りを行った。「サトウキビに対する農薬散布は20年以上前に1回試験的に行っただけである。」「山林への農薬散布は大山の山腹を周回する道路より上部およびその他の山の上部に対して行われる」とのことであった。イタチの放逐は担当職員が知り得るかぎり「昭和47年よりずっと以前に行われた」とのことであった。また、みどり推進課職員の話では「マツ枯れ対策として昭和52年から56年に伐採焼却が行われた」とのことである。また、「平成6年にイノシシが13頭逃げ、そのうち6頭は駆除されたが増えている」とのことである。「昭和60年頃にイタチの増加が目立ち、サトウキビへの被害もでている」ようである。「昔はヘビが多く

いたが、今は少ない」とのことであった。

30日午後は島全体の平地地域と海岸線の草むらを調査したが両生爬虫類の目撃はなかった。31日も大山、越山などの丘陵地域と知名町内などの平地を回ったが両生爬虫類の目撃は得られなかった。越山で畑作業中（ジャガイモ収穫）の高齢の男性2人から聞き取りを行うことができた。「小学生であった昭和15年頃はアオカナヘビ（地元ではツナギヤ、尾がまた生えてつながるの意味）はたくさん見られ、畑周辺でも見られた。昭和20年か21年にイタチが放され、その頃から減った。最近は見ることがない」とのことである。また、

「アオダイショウがネズミ駆除のために入れられたことがある」とのことである。そのほかに、道路作業員の男性からもアオカナヘビの生息に関する聞き取りを得ることができた。「アオカナヘビを昔はよく見たが、今は町の中で時々見る程度」とのことである。大山山腹で畑作業中の高齢の夫婦の話では、「アオカナヘビのようなトカゲは見たことがないが、トカゲは見たことがある。ヤモリ（地元ではヤマビコ）はいる」とのことである。町内のニワトリ飼育作業中の民宿の高齢の女性の話では、「イタチは来ないのでニワトリに被害はない。アオカナヘビのようなトカゲは見たことがない」とのことである。あまり防御の厳重でないニワトリ飼育施設であった。その後、知名町内の神社などの草むら、墓地周辺、海岸線の道路周辺の草地などを探索したがアオカナヘビやそのほかの両生爬虫類を見ることはできなかった。

沖永良部島で生息の文献記録があるのはハロウエルアマガエル、ヌマガエル、ウシガエル、リュウキュウカジカガエル、ヒメアマガエル、ミナミヤモリ、ホオグロヤモリ、オンナダケヤモリ、キノボリトカゲ、オオシマトカゲ、ヘリグロヒメトカゲ、アオカナヘビ、メクラヘビ、リュウキュウアオヘビ、アカマタ、ガラスヒバァである（前田・松井、

1989；当山，1984；当山・太田，1991）。さらに、環境省の自然環境保全基礎調査において、ヌマガエル、ミナミヤモリ、ホオグロヤモリ、オオシマトカゲ、ヘリグロヒメトカゲ、リュウキュウアオヘビ、アカマタ、ガラスヒバァの生息記録が示されているが、いずれも1992年以前の記録である（自然環境研究センター，2001）。単純に過去の文献記録と比較するとハロウエルアマガエル、リュウキュウカジカガエル、ヒメアマガエル、オンナダケヤモリ、キノボリトカゲ、アオカナヘビ、メクラヘビについては近年の記録がないということになる。

本調査では、移入種と考えられるウシガエル以外の生息確認ができなかった。事情により夜間調査を行うことができなかったため、両生類とヤモリ類については生息状況について判断できなかったが、主として調査したアオカナヘビについては、聞き取り結果とも合わせて、生息数はきわめて少ないと判断してよいであろう。イタチの移入が減少の要因となっていることが聞き取りから推察できる。しかし、移入後50年以上が経過していることが示唆されているので、その関係を量的に示すことは困難であろう。住居周辺にアオカナヘビが残存して生息している可能性があることが聞き取りから示唆されたので、山林や畑作地への大規模農薬散布もアオカナヘビの減少に関連している可能性はないとはいえない。しかし、過去の一時期であることから、関連を証拠づけることはできないであろう。

引用文献

- 前田憲男・松井正文. 1989. 日本カエル図鑑. pp. 206. 文一総合出版, 東京.
- 自然環境研究センター編. 2001. 生物多様性調査動物分布調査(両生類・爬虫類)報告書. pp. 264. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田市.
- 当山昌直. 1984. 琉球の両生爬虫類. p. 281-300. 全国大会記念誌 沖縄の生物. 沖縄生物教育研

研究会, 那覇市.
 当山昌直・太田英利. 1991. 琉球列島の両生・爬虫類. p. 233-254. 平成2年度南西諸島における

野生生物の種の保存に不可欠な諸条件に関する
 研究報告書. 環境庁自然保護局

ヤクヤモリ *Gekko yakuensis* の馬毛島からの記録

竹内 寛彦・戸田 守

606-8502 京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院理学研究科動物学教室

A new record of *Gekko yakuensis* from Magejima Island of the Osumi Group, Japan

By Hirohiko Takeuchi and Mamoru Toda

Department of Zoology, Graduate School of Science, Kyoto University, Sakyo, Kyoto 606-8502, Japan

これまでの調査・研究により, 大隅諸島には2種のヤモリ, ミナミヤモリ *Gekko hokouensis* とヤクヤモリ *G. yakuensis* が分布することが知られている。この地域におけるこれら2種の分布は複雑で, 黒島, 硫黄島, 竹島, および口永良部島からはミナミヤモリのみが, 種子島からはヤクヤモリのみが, そして屋久島からは両種が報告されている(柴田, 1981, 1989, 1990; 森田, 1990)。今回, 著者らは, これまでにヤモリ類の調査が行なわれていない大隅諸島の馬毛島でヤモリ類を対象とした調査を実施し, 採集標本の検討を行なったので報告する。

調査は, 2005年8月16-17日に馬毛島東部の海岸付近で行なった。夜間に, 露岩, 石垣, 樹木の幹などを探索し, 5個体のヤモリを発見・採集した。標本の観察および測定は, 10%ホルマリンで固定した後, 実体顕微鏡とノギスを用いて行なった。なお, これらの標本は, 現在, 京都大学総合博物館爬虫類コレクション(KUZR)に登録されている。

観察の結果, これらの標本はいずれも,
 (1) 尾の基部にある側肛疣 (cloacal spur) が1対, (2) 胴部背面には大型鱗 (enlarged

tubercles) が散在するが, 四肢背面にはそれが認められない, (3) オスには4-5個の前肛孔が存在する, などの特徴から, ミナミヤモリまたはヤクヤモリであることが確かめられた(柴田, 1981; 岡田, 1998)。また, 柴田(1981)がヤクヤモリとミナミヤモリの識別形質として挙げている, 尾の環状溝前縁の大型鱗 (caudal tubercles) の数, および間鼻板 (internasal) の大きさについての観察結果は, その他の計測・測定値とともに表1にまとめた。KUZR61038とKUZR61040はともに, 尾の環状溝前縁の大型鱗が尾の先端付近まで認められ, 間鼻板がその後方の鱗よりも明らかに大型であったことから, ヤクヤモリと同定された。一方, 他の3標本のうち, 2標本(KUZR61036とKUZR61039)は基部から, 残りの1標本(KUZR61037)は自切節第6節から先が再生尾であったため, 尾の環状溝前縁における大型鱗対数は決定できなかったものの, いずれの標本も大型の間鼻板を持つことから, やはりヤクヤモリであると考えられた。ただしKUZR61039では, 間鼻板に加え, その後方に接する1枚の鱗も大型であり, さらにKUZR61037では間鼻板とその